

鹿児島県立穎娃高等学校

穎娃高コミュニティ～ゆい～

～地域の未来を切り拓く人材育成プロジェクト～

1 学校の概要

(1) 沿革

本校は、昭和6年に鹿児島県穎娃村立高等公民学校として創立した。その後、村立穎娃青年学校、県立移管鹿児島県立穎娃工業学校と改称し、昭和23年には普通科を増設して電気・土木・普通科3科の県立全日制高等学校となった。そして、昭和31年に現在の鹿児島県立穎娃高等学校へと改称し、学科の統廃合を経て、平成26年に機械電気科を新設、普通科と二学科併設となり現在にいたる。

(2) 生徒数

普通科42名、機械電気科95名の計137名である。生徒の多くは、南九州市・指宿市出身であるが、枕崎市・その他から入学してくる生徒もいる。

(3) 特色

校是「開拓精神」、校訓「自主」「自立」「創造」のもと、これまで、約1万9千人の卒業生を国内外に輩出してきた。普通科は、少人数教育又はチームティーチングによる学習で学びを深め、総合的な探究の時間で地域協働活動を行うことで、昨年度に引き続き、思考力・判断力・表現力の習得、今年度はさらに主体性や協働性を身に付けることを目指してきた。機械電気科は、1年次に工業に関する基礎的科目を学び、2学年から機械コース・電気コースを選択して専門的知識・技術を習得し、資格取得やものづくり、パテントコンテストに取り組んでいる。「掴む栄光、叶える穎娃高」をスローガンにし、「地域を愛し、地域とともに学びを深めていく視野の広さを持った生徒」をアドミッションポリシーの一つに、日々の教育活動を実践している。

2 事業の概要

(1) 事業のねらいや目標

ア 地域の特色及び課題

南九州市は雄大な山なみと海に囲まれ、自然と人が共生することで「創造と活力に満ちた住みたくなるまち」の構築を目指している。

令和4年度から総合的な探究の時間を中心に、南九州市の基幹産業である「茶業」をテーマに設定し、知覧茶の生産者、南九州市役所茶業課など様々な機関や地域事業者と連携しながら、生徒による「課題解決型学習」を行い、生徒発表会ではそれぞれが考えた課題解決方法を提案した。

そして、その取組内容を茶業振興会総会で市長や関係機関、多くの生産者に報告を行うなどの体験を行った。

令和5年度は3年生が考えた解決方法アイデアの中でも、「知覧茶四種飲み比べセット」の商品開発や「移住・就農セミナー」のライブ配信を実現させた。また、本事業をきっかけに、南九州市商工会 頴娃地区より「えいのゴッソイまつり」への協力依頼もいただき、生徒達は開発した商品の販売活動や知覧茶のふるまいなどボランティア活動を行った。

令和4年度は生徒が主体的に地域の課題を考えることで、郷土への学びや愛着が醸成されてきた。今年度は、それを実現して地域で活動することで、地域のために行動し、支えることができる人材の育成をさらに目指してきた。今後も、この取組を継続し、頴娃町の活性化に向けて生徒達が地域協働活動を行うことで、地域における本校の意義・役割を果たしていきたい。

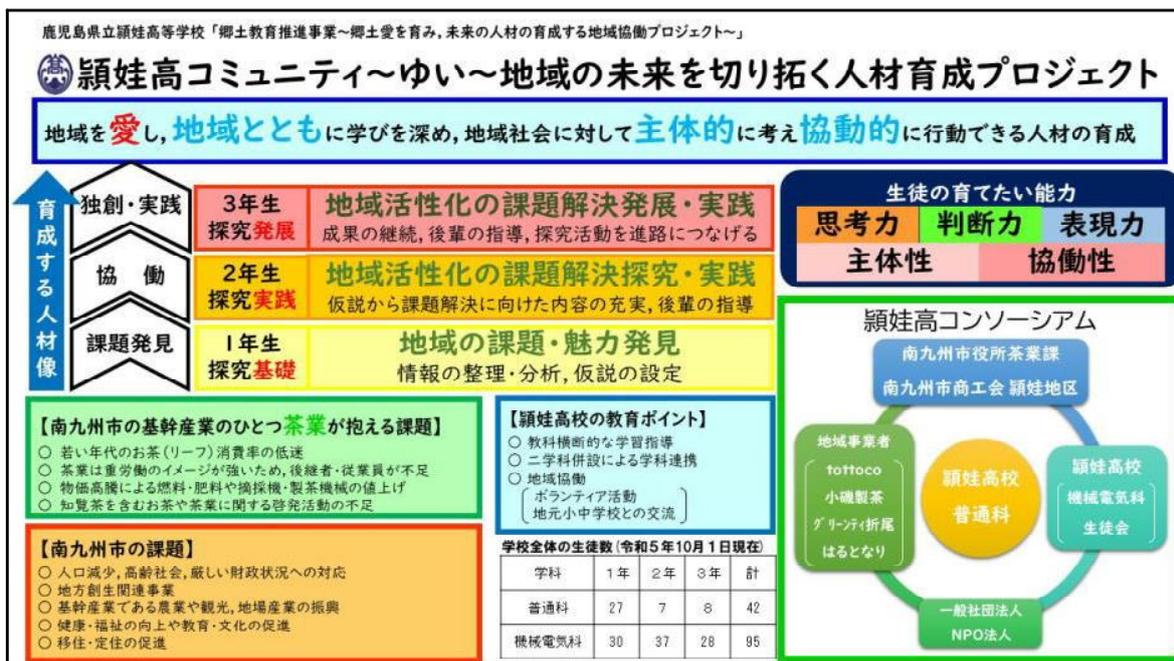
イ 育成する人材像

- (ア) 地域と協働しながら生徒が南九州市の産業(茶業や観光業など)について学びを深め、地域活性化のため、地域事業者から知り得た情報を対外的に発信できる人材の育成。
- (イ) 思考力・判断力・表現力を育成するとともに、生徒が主体的になって地域の課題について解決方法を立案・実現する。そして、二学科併設の特色を活かしながら、課題解決に向け、地域と協働しながら頴娃町の活性化を図り、長期的に南九州市に貢献できる人材の育成。

ウ 期待される効果

- (ア) 地域の自然や文化、産業に理解を深めたり、考える機会が増えることで、地域の良さが再認識され、郷土愛を育むことができ、地元への定着の意識が高まる。
- (イ) 高校生が地域の情報を対外的に発信し、地域が抱える課題について地域と協働しながら解決に取り組むことで、地域における本校の信頼を高めることができる。
- (ウ) 地域にとっても、高校生の視点を通して、改めて地域の課題解決や活性化への意欲や関心を高めることが期待できる。

(2) 事業のイメージ図



3 事業の経過

日	内 容	参加者
4 月		
19	オリエンテーション 2・3年生から1年生へ昨年度の取組を発表	普通科1～3年
5 月		
24	自己理解ワーク(自分の興味や得意を知る)	普通科1～3年
31	自己紹介ワーク(スピーチ作成・練習)	普通科1～3年
6 月		
7	インタビュー技法(インタビューの技法を学び, 練習)	普通科1・2年 tottoco
14	〔出前授業〕 デザインに関するレクチャー(商品デザインについて学ぶ)	普通科1～3年 崇城大学 tottoco
21	インタビュー準備(ゴッソイまつりについて知る・仮説や質問事項の作成)	普通科1・2年 ゴッソイまつり実行委員会 一般社団法人アソビシロ
7 月		
5	ゴッソイまつり地域インタビュー(インタビューの実践)	普通科1・2年 ゴッソイまつり実行委員会
12	インタビューの情報共有(情報の整理や伝える練習)	普通科1・2年 ゴッソイまつり実行委員会
31	2023かごしま総文 知覧茶おもてなし活動	運営協力員
8 月		
1	2023かごしま総文 知覧茶おもてなし活動	運営協力員
10	【校外活動】@鹿児島国際大学 「高校生課題探究発表大会2023」ステージ部門・ポスター部門 ※ 台風により中止	普通科3年
9 月		
6	お茶の淹れ方教室(知覧茶を知る) インタビュー準備(仮説や質問事項の作成)	普通科1・2年 tottoco

13	生産者インタビュー(3人の生産者に聴き取り, 課題を抽出)	普通科1・2年 tottoco (有)小磯製茶 (有)グリーンティ折尾 はるとなり
20	ワークショップ(茶業の流通構造が理解できる体験) 第1回コンソーシアム会議	普通科1・2年 tottoco コンソーシアム委員 代表生徒6名
27	課題の整理①(聴き取り事象の整理)	普通科1・2年
10月		
4	【校外学習】 茶畑及び茶工場 @小磯製茶・グリーンティ折尾・はるとなり	普通科1・2年 (有)小磯製茶 (有)グリーンティ折尾 はるとなり
18	課題解決方法プレスト(方法論を学ぶ)	普通科1・2年 tottoco
21	「知覧茶四種飲み比べセット」販売活動 @文化祭 展示・ステージ部門で活動報告 @文化祭	普通科3年 普通科1・2年
25	課題解決方法プレスト:実践①	普通科1・2年 tottoco
11月		
1	中間発表会 準備	普通科1～3年 tottoco
8	中間発表会	普通科1～3年 tottoco
15	課題解決方法プレスト:実践②	普通科1・2年 tottoco
22	課題解決方法プレスト:実践③・プロトタイピング①	普通科1・2年 tottoco
23	【校外活動】@知覧平和公園自由広場 「知覧茶マルシェ2023 with晩秋のおもてなし」販売活動	普通科2年
26	【校外活動】@えいのゴッソイまつり 「知覧茶四種飲み比べセット」販売活動 知覧茶ふるまいボランティア活動 ランプシェード・スタンプラリー制作	普通科3年 ボランティア有志 機械電気科
12月		
2	【校外活動】@みやまる商店 「移住・就農セミナー」ライブ配信	普通科3年
6	課題解決方法プレスト:実践④・プロトタイピング②	普通科1・2年 tottoco
13	生産者と情報共有会	普通科1・2年 (有)小磯製茶 (有)グリーンティ折尾 はるとなり
20	情報共有会の振り返りと改善	普通科1・2年
1月		
10	発表準備	普通科1～3年 tottoco
17	企画コンテスト前半(生産者やコンソーシアム委員等に向け発表)	普通科1～3年 tottoco はるとなり
18	【校外活動】@かごしま県民交流センター 「第4回 高校生探究コンテスト」ポスター発表の部	普通科2年

24	企画コンテスト後半(生産者やコンソーシアム委員等に向け発表) 第2回コンソーシアム会議	普通科1～3年 コンソーシアム委員 代表生徒6名
31	企画コンテストの振り返り	普通科1年

4 事業の内容

(1) オリエンテーション・昨年度の取組を発表

本事業を始めるにあたりオリエンテーションを行った(図1)。顕娃高校の総合的な探究の時間では、地域と学校が連携する「地域協働活動」に取り組んでいること、そして“高校生が地域のために何ができるか”を考える「課題解決型学習」を行っていること、テーマを南九州市の基幹産業である「茶業」に設定して活動していることを1年生に伝えた。

続けて、2・3年生は各班が着目した課題や実際に考えたアイデアを発表した(図2)。先輩の発表を見た1年生は、このような取組をしていることに驚き、自分も頑張ろうと意欲を見せる一方で、「自分にもできるだろうか」という不安を抱く感想も聞こえてきた。



図1 オリエンテーション



図2 先輩から後輩へ発表

(2) 自己紹介ワーク・インタビュー技法を学ぶ

昨年度は課題解決方法を考える上で、収益などビジネスの観点を入れたことにより、戸惑う生徒が多かったことを反省し、生徒自身の興味や特技を活かせるように、まず自己理解ワークを行った。

そして、これから外部の方と接する機会が多くなるため、自己紹介がしっかりできるように(図3)、スピーチ文を考え、タブレットで撮影しながら実践練習した(図4)。特技などを入れ込みながら、印象に残る紹介文を考えたり、2・3年生が1年生にアドバイスする様子も見られた。

実際のインタビューに向け、どのようにインタビューすればよいのか、コーディネーターから技法を学んだ(図5)。昨年度に引き続き、知覧茶コーディネーターの川口塔子さんに授業のコーディネートをお願いしている。川口さんから生徒達は、初めて話す相手から、たくさん話を聞き出すポイントなどを教わり、職員を対象にインタビュー練習をした(図6)。上級生は昨年度からの経験もあり慣れた様子だったが、1年生は恥ずかしさやためらいがあり、なかなか表現できない姿を見て、場数を踏むことの大切さを感じた。



図3 3年生による自己紹介実演



図4 自己紹介の実践練習



図5 インタビュー方法を指導



図6 職員にインタビュー練習

(3) 〔特別授業〕崇城大学 芸術学部 デザイン学科 馬頭亮太先生

昨年度の取組で、アイデアを考える中でイラストを描く生徒が多く見られ、専門家による授業の必要性を感じていた。一般社団法人アソビシロの原本太郎さんから馬頭先生を御紹介いただき、商品デザインに関する特別授業をお願いした(図7)。

一つの商品が誕生するまでに、どのような過程を踏むのか、実際に馬頭先生が携わった商品を例に挙げながら、具体的に授業をしていただいた。

パッケージデザインを考える過程で大切な5W1Hなどを示していただき、商品開発を手掛ける班は特に熱心に聞き、活発な質疑応答が交わされた(図8)。馬頭先生からも「色は、お茶＝緑色なの？」など、デザインに悩む生徒達がハッと気付かされる問いかけもいただき、とても有意義な授業となった。



図7 デザインの裏側を伝える



図8 商品開発班がデザインを相談

(4) ゴッソイまつり地域インタビュー

南九州市商工会より穎娃町の行事である「えいのゴッソイまつり」での連携の話をいただいた。この祭りは穎娃町の活性化のために転換期を迎えており、大幅な改革に取り組んでいた。変化を伴うということは、当然、地域住民は賛成や反対という様々な意見に分かれていた。

そこで、地域の様々な立場や年代の方に生徒達は中立な気持ちを持って聴き取りを行った。生徒は事前に祭りの実行委員会でもある原本太郎さんから、ゴッソイまつりの歴史や役割、今後も人口減少が予測される中で、どのようにすれば祭りを存続できるかなど学んだ(図9)上で、インタビューに臨んだ(図10)。

インタビューの実践も兼ねていたが、地域の方の熱い想いを聴き、自分なりの意見を発言する生徒も見られ、想像以上の生徒の反応が見られた。



図9 祭りの歴史や意義を学ぶ



図10 祭りへの想いを聴く

(5) 生産者インタビュー

知覧茶の生産者3名にインタビューを行った(図11・12)。昨年度より、この事業を通して、小磯雅一さん(有限会社 小磯製茶)、折尾俊一さん(有限会社 グリーンティ折尾)、永山和博さん(はるとなり)に御協力いただいている。2年生は昨年度からの流れもあり、慣れた様子でインタビューをしていたが、1年生は緊張している様子で、また茶業に関する知識もまだ不十分とうこともあり、事前に準備していた質問が終わると、次に何を質問したらよいか、思考が止まってしまう姿が見られた。2年生も質問を深掘りしていくという作業はまだ足りておらず、インタビューの技術は今後でも鍛えていく必要があると感じた。



図11 永山和博さん(はるとなり)



図12 小磯雅一さん(小磯製茶)

(6) [ワークショップ] 茶業の流通構造が理解できる体験・第1回コンソーシアム会議

第1回コンソーシアム会議では、生徒の授業の様子を実際にコンソーシアム委員の皆様に見学していただいた。

川口塔子さんによるブレンドのワークショップでは、永山和博さんが栽培された“さえみどり”，“やぶきた”，“おくみどり”を使用し(図13)，生徒はお茶のブレンドを体験した。ブレンドするたびに味が変わったりすることを楽しみながら，味わってお茶を飲む姿が見られた(図14)。

そして，3年生も各班の企画の調整に向けて，生産者からアドバイスをいただいた。



図13 生産者からお茶の説明



図14 3種をブレンドして試飲

(7) 【校外活動】「知覧茶マルシェ2023」・「えいのゴッソイまつり」

知覧平和公園自由広場で開催された知覧茶マルシェでは，普通科2年生6名が小磯製茶の「かいもんみどり」をお客様に試飲していただきながら，販売活動を行った(図15)。生徒は事前に，知覧茶の「かぶせ」や「深蒸し」の特徴をPRすることを打ち合わせして臨んだ。しかし，いざ本番になるとお茶のブースが並ぶ中で，お客様に注目してもらうためには，どのように声掛けすればよいのか，試行錯誤しながら，時には落ち込みながらの有意義な活動だった。宣伝が購入につながると喜びも一層だった。

えいのゴッソイまつりでは3年生の商品開発班と，ボランティアの生徒で「知覧茶四種飲み比べセット」の販売(図16)や，南九州市茶業課の皆さんと茶節のふるまいなどを行った。当日の南日本新聞に，この取組が新聞掲載されたこともあり，地域の方からは「穎娃高生，頑張っているね」という声掛けをいただき，準備していた商品70個すべて完売することができた。地域の大きな行事に生徒が溶け込みながら活動している様子は，多くの方に喜ばれ，生徒自身の達成感にも大きくつながっていた。販売活動を終えた商品開発班は，「デザインで自分たちの意図を伝えることは本当に難しかった」，「私達の活動で本当に“一番茶の価値を伝える”ことができたのだろうか」という振り返りを話しており，完売の達成感だけでなく，冷静に自分達の活動を分析していたことに成長を感じた。



図15 知覧茶マルシェ2023



図16 えいのゴッソイまつり

(8) 【校外活動】「移住・就農セミナー」ライブ配信

ネット環境の問題から、学校が所在する宮脇地区にある「NPO法人いっしょき宮脇」の活動拠点である「みやまる商店」で、移住・就農セミナーをライブ配信した(図17)。

この班は本来、人材不足という課題に対して、インターンシップを実現したらどうかというアイデアを提案していた。しかし、摘採機の危険性やケガをした場合の保険の問題などで、提案が一旦、白紙になり、コロナ禍で広まったオンライン会議システムを用いたライブ配信を新たに提案し、ようやく実現することができた。

この日のために、生徒は生産者や地元の商店にインタビューに行ったり、南九州市の観光地を巡って撮影し動画制作するなど、準備をしてきた(図18)。告知が遅くなってしまい当日は奈良県在住1名を含む、合計11名の参加だった。移住に興味があるというより、高校生がこのような活動をしていることに興味を持ってくださった鹿児島県内の方が中心だった。

生徒は緊張しながら司会を務めてくれたコーディネーターさんのサポートをもらいながら、無事に配信を終えた。動画作成など自分自身に役割を与えられたことでより達成感を得たようだった。



図17 告知ポスター



図18 ライブ配信

(9) 生産者と情報共有会

これまでの活動で整理し、着目した課題とその解決方法を生産者と共有した(図19)。生徒は活動しながら、足りていない情報を新たに追加質問したり、生産者からは生徒の話の中で感じた疑問点などを伝えていただいた。

その上で再度、情報を整理し直した(図20)。

一つの班は“外国人労働者とのコミュニケーション”を課題として捉えていたのだが、情報共有の中でインタビューした生産者の工場では当てはまらないことが分かり、企画をゼロからやり直すことになった。生徒は一瞬、動揺していたが、昨年度も同じように企画を練り直した班がいたため、自分たちも頑張ろうと前向きに捉えてくれていた。



図19 生徒から生産者へ情報共有



図20 アイデアを整理する生徒

(10) 企画コンテスト・第2回コンソーシアム会議

1・2年生はこれまで各班が着目した課題とそれに対する解決方法を、3年生は各プロジェクトの振り返りをコンソーシアム委員や生徒、職員に向けて発表した(図21)。これまで特に1年生は発表のたびに原稿を準備しており、発表に想いが込められていない印象があった。しかし、今回の発表では抑揚やジェスチャー、パンフレットなど小道具を使いながら、これまでで最も良い発表を見せてくれた。課題としては、生徒からの質疑応答の少ない点である。コンソーシアム委員やコーディネーター、職員からは質疑があるが、生徒は2・3年生の一握りの生徒しか質問することができなかった。発表会を終えた後に個別に声を掛けてみると、「本当に実現することを想定したアイデアなのか」、「発表する言葉に感情が込められていなかった」など、これまで活動が続けてきただけあって、的確な指摘をしていた。それを全体の場で伝えることができなかったことは非常に残念であり、運営する側としてもそのような雰囲気作りができていなかったことに課題を感じた。

その後のコンソーシアム会議(図22)では、今後の継続性を希望する声が多かった。アンケートには意見交換会の在り方や、地域のお茶業から見た茶業など幅を広げてはどうかなど、様々な御意見を頂いた。



図21 企画コンテスト(生徒発表会)



図22 第2回コンソーシアム会議

5 事業の成果とその評価

(1) 課題解決の状況

今年度は3年生が、鹿児島県茶生産協会の「お茶好き高校生」育成・支援事業から助成金を頂き、「一番茶の魅力を伝えるための商品開発」、また、南九州市役所共催で「お茶農家に人材が集まるための移住・就農セミナーライブ配信」が実現できたことは大きな成果であった。実働になると、様々な関係機関と連携が必要になるため、3年生は夏期休業中や放課後なども企画を練り直し取り組んできた。その姿は後輩達への刺激となり、良い相乗効果となっていた。また、ゴッソイまつりを通して機械電気科とも横断的に連携し、祭りの集客や盛況に貢献することができた。

1・2年生は知覧茶生産者に聞き取りを行い、課題設定・解決方法の企画・立案を行ってきた。2年生は継続的な活動だったためインタビューへの慣れも見られる一方、課題を深掘りして思考を深める活動はまだまだ足りていなかった。また、1年生は当初、この活動自体への取組姿勢が心配されたが、ゴッソイまつり地域インタビューの頃になると、真摯に向き合う姿が見られるようになった。地域協働活動で大切なことは、職員が生徒達に地域の皆さんが自分の仕事を止めて本校の授業に協力して下さっていることなど、活動の背景をしっかりと伝えることにある。

昨年度はビジネスの観点を盛り込み、根底の課題を徹底的に深掘りしていったため、生徒に困難さはあったが、提案されたアイデアにはリアルさがあり、レベルの高いものであった。今年度は、本校の取組として継続できるようにシステム化するカリキュラムを構築する目的もあったため、運営側としても昨年度より妥協していた部分もあった。そのため、思考を深めることが足りなかったという反省点がある。

(2) 評価

ア 地域の活性化

南九州市の基幹産業である茶業に一貫して取り組むことで、メディアに取り上げて頂いたこともあり、この取組の地域への知名度は格段に上がった。そのため、知覧茶マルシェやえいのゴッソイまつりでは、地元の方からの生徒への励ましの言葉を非常に多く感じた。その声掛けは、生徒のやりがいや達成感につながり、さらに地域のために何か取り組みたいという愛着へと発展していた。

知覧茶はまだまだ全国的にも知名度が高いとは言えない。商品開発など成果物がなくても、生徒達が活動し続けることが知覧茶の啓発につながり、南九州市の発展にもつながることを実感した。

イ 人材育成

大人しく控えめな生徒が多いが、継続的な活動を通して、2・3年生は表舞台に立つ度胸が付いてきたように感じる。生徒は自ら体験し、地

域事業者の情熱に触れ、自らの役割を見つけることで内面も大きく成長してきた。3年生の中には将来、自分の目指す職業を活かして南九州市の活性化のために働きたいという生徒も出てきた。まだまだ思考力・判断力・表現力は発展の途上にあるが、今後も対外的な活動や普段の教科指導も通して、それらの力を醸成していきたい。

ウ 生徒の自己評価

特にプレゼン(表現力)を身に付けることに力を注いできたため、中間発表・最終発表で以下のようなルーブリック評価を自己評価・他者評価4項目(発表態度・発声・プレゼン画面・質問への回答)で行ってきた。

発表態度では、「原稿を見ることなく、聴き手全体を見渡しながら」という項目が3.8%から56.3%と大きく変化している。3学年で一緒に活動する意図として、先輩の姿から後輩達が自然と学んでほしいと願っている。質疑応答の受け答えの作法などを真似ている点からも、生徒達は教員側の意図を組んでくれている。

いずれの項目も評価4の数値が上がっているが、2・3の数値があまり変化していない部分を見逃してはならない。これまでの活動を観察していても、発言する生徒に偏りが見られたり、どうしても表現することが苦手な生徒も一定数いる。そのような生徒にも今後も寄り添い続け、上位層の生徒だけでなく、生徒全体の成長につなげていきたい。

評価基準		中間発表	最終発表	
発表態度	4	原稿を見ることなく、自身の言葉で話しており、聴き手全体を見渡しながら、聴き手の反応も確かめながら説明を行っている。	3.8%	56.3%
	3	原稿を確認しながら進めているが、原稿に頼るのではなく、自身の言葉で説明を行っており、聴き手の反応を確認しながら進めている。	50.0%	15.6%
	2	原稿を見ずに説明を行っているが、原稿を丸暗記であることが推測され、また聴き手全体を見渡ししているが、反応を確かめることなく、進めている。	26.9%	28.1%
	1	原稿を読み上げる形での説明となっており、聴き手を意識した発表となっていない。	19.2%	0.0%
発声	4	聞き取りやすい声で、声の強弱や間の取り方も上手く、身振りや手振りもあり、聞き入ってしまうほどである。	11.5%	21.9%
	3	聞き取りやすい声で、声の強弱や間の取り方も上手く、話していることがすべて聞き取ることができた。	50.0%	46.9%
	2	聞き取りやすい声で、声のテンポや強弱などは一定であるが、話していることがすべて聞き取ることができた。	30.8%	31.2%
	1	聞き取りにくい(声が小さい・早口・語尾が不鮮明)。また、声のテンポや強弱に変化がない。	7.7%	0.0%
プレゼン画面	4	自身の発表を裏付ける資料が収集されており、また資料を説得力のある使い方を行っており、発表と資料の互いに作用し合って良い効果が見受けられる。	57.7%	71.9%
	3	自身の発表を根拠となる資料が収集されているが、資料を説得力のある効果的な使い方が出来ていないため、発表と資料の互いに作用し合って良い効果が見受けられない。	38.5%	25.0%
	2	収集した資料をただ単に張り付けているだけであり、説得力に欠ける。	3.8%	3.1%
	1	資料をほとんど使うことなく、発表原稿をそのまま画面にしたようで、文字ばかりで読む気にもならない。	0.0%	0.0%
質問への回答	4	聞き手の質問の意図に沿った回答を、根拠をあげて行っている。	80.8%	100%
	3	聞き手からの質問に回答しているが、質問された内容と回答した内容が合致していない。	19.2%	0.0%
	2	聞き手からの質問に、「はい・いいえ」、「分かりません」などの基本的な回答しか返ってこない。	0.0%	0.0%
	1	聞き手からの質問に対して、ほとんど答えない。	0.0%	0.0%

表 プレゼン(表現力)ルーブリック評価

6 今後の課題

本校は独自で行った1年間と、郷土教育推進事業の実施校としての2年間を合わせると、地域協働活動を3年間、取り組んできたことになる。当初は学校も地域も手探りの状態で、また地域事業者の皆さんは学校の取り組む姿勢の本気度を観察していたように感じる。今年度は生徒が地域の行事に出て行き活動する機会が多かったため、その様子を観察しながら、3年間積み上げてきた地域からの信頼を感じるが多かった。一方で、地域からの信頼はこの活動の“継続性”への期待へととなっている。そこで大きな課題となってくるのが、活動のための“資金・時間・人材”である。

この補助事業を受けながら取り組むことができた活動を、本校独自で自走する道を現在も検討している。生徒発表を終えた生徒達は、来年度、新1年生に向けて発表ができるように発表を聞いたコンソーシアム委員より頂いたコメントシートをもとに、アイデアのブラッシュアップを行っていく。現在は毎年、生徒が新たな課題・解決方法を企画・立案する方法を取っているが、より内容を深めていくためには、先輩から後輩へ各プロジェクトを受け継いでいく手段も検討する必要があるのではないかと考えている。地域協働活動の基盤が整った今、本校は次の段階へとステージを変える節目に立っている。

7 協働先一覧

No.	協働先	所在地	主な内容
(1)	南九州市役所 茶業課	南九州市	地域協働への協力
(2)	南九州市役所 企画課	南九州市	地域協働への協力
(3)	南九州市商工会 顛娃地区	南九州市	地域協働への協力
(4)	えいのゴッソイまつり実行委員会	南九州市	地域協働への協力
(5)	tottoco	南九州市	コーディネーター
(6)	有限会社 小磯製茶	南九州市	地域協働への協力
(7)	有限会社 グリーンティ折尾	南九州市	地域協働への協力
(8)	はるとなり	南九州市	地域協働への協力
(9)	一般社団法人アソビシロ	南九州市	地域協働への協力
(10)	有限会社 浜田茶業	南九州市	商品開発への協力
(11)	崇城大学	熊本市	出前授業

(12)	株式会社 いせえび荘	南九州市	研究協力
(13)	りんふあーむ	南九州市	研究協力
(14)	野菜菓工房 楓fu-	南九州市	研究協力
(15)	Le.plan.de.AK	南九州市	研究協力
(16)	NPO法人 いっしょき宮脇	南九州市	地域協働への協力

8 その他(関連する新聞記事等)

南九州市の頤娃高校で14日、崇城大学(熊本市)の馬頭亮太助教(37)による出前授業があり、普通科の1

商品デザインプロに学ぶ 頤娃高で出前授業



南九州市の頤娃高校で14日、崇城大学(熊本市)の馬頭亮太助教(37)による出前授業があり、普通科の1

3年42人が商品パッケージのデザインを学んだ。馬頭さんは、茶農家とのお節業者が開発した茶節

生徒の質問に答える崇城大学の馬頭亮太助教
＝南九州市の頤娃高校

「SUB SOUP」などを手がけたデザイナー。同校普通科は総合的探究の時間で茶農家の商品開発に取り組んでおり、プロの手法を学ぼうと講師に招いた。

馬頭さんは「デザインのコンセプトは、伝えたいこと」とが明確な文章になる」などと話し、自分が手がけた商品を例に挙げてデザインを作る過程を説明した。

3年の新留美向さんは「教わったことを生かし、生産者の思いに応えるデザインを考えたい」と話した。(兵頭昌岳)

南日本新聞(令和5年6月21日)

知覧茶の課題解決へ

穎娃高生がプロジェクト

地域と協働して課題解決「ライブ配信」の2班に分
取り組む郷土教育推進事
業のプロジェクトの一環
生徒らは、総合的な探究の
時間で1年時に地域住民に
インタビュして課題を探
り、基幹産業の茶業に着目
した。知覧茶の認知度向上
と担い手不足に課題を絞
り、「商品開発」と、就農
希望者に移住を呼びかける

知覧茶の認知度向上につなげたい
と、南九州市の穎娃高校3年生が知
覧茶の飲み比べセットを開発した。
「えいのゴッソイまつり」(26日、
穎娃運動公園)で70セットを販売
する。茶業の担い手不足解消に向
け、移住セミナーのネット配信も行
う。



知覧茶の飲み比べセットを開発した生徒ら
＝南九州市の穎娃高校



12月2日に移住セミナーをライブ配信する
穎娃高校の3年生

商品開発班は、普通科3年
新留美向さんは「生産者と
対話を重ねる中で、茶作り
への熱意が伝わってきた。
一番茶の価値が消費者に伝
わってほしい」と話す。
ライブ配信は月2日午
後3時～4時半。申し込み
は、同校の事務局 enishi@soj.sotabandai.com
(兵頭昌岳)

ライブ配信班は、求人票
だけでは仕事や地域の暮ら
しが伝わらないと考え、地
元の名所や生活空間を撮っ
た動画を作成した。茶農家
にもインタビュし、移住
・就農希望者に茶業と穎娃
の魅力を発信する。

南日本新聞(令和5年11月26日)

南九州市の穎娃高校の生徒が2日、
茶業就農希望者向けの移住セミナーを
オンラインで開催した。普通科3年の
4人が地域取材して作った動画や写
真で、知覧茶の魅力と穎娃の暮らしを
紹介した。

1年時から指導してきた知覧茶コー
ディネーターの川口塔子さん(33)鹿
児島市出身IIが総合進行役となつて、
地元NPOのコミュニティー施設「み
やまる商店」から70分間ライブ配信し
た。

飯伏望乃さんが作った動画で観光名
所を巡った後、具体的な空き家情報や
商店の品ぞろえなどを紹介。先輩移住
者として川口さんが移住成功のこつを
助言し、生徒が茶農家で収録したイン
タビュも放映した。視聴者からは「保
育園や病院の情報はためになる」など
の感想が寄せられた。
配信を終え、中島優歩さんは「地域

茶どころ南九州移住へPR 穎娃高生がライブ配信



穎娃の暮らしや茶業の魅力を紹介する穎娃高
校の生徒ら 南九州市穎娃のみやまる商店

の人にインタビュを重ねて人前で話
せるようになり、自分でも成長したと
感じる」と話した。
移住の相談は、南九州市企画課II0
993(83)2511。(兵頭昌岳)

南日本新聞(令和5年12月6日)